

## 清溪川

Cheong gye cheon

韓国



**韓**国一の流域面積をもつ漢江に注ぐ清溪川は、ソウルの市街地を流れており、ソウル市庁や東大門のそばを通っています。大都市での河川再生の成功事例として、アジアだけではなく、世界的注目をあつめた再生事例です。

1940～1950年代、清溪川には土砂やゴミがあふれ、河川沿いの住居からの生活排水により汚染されていました。このような状況と都市化に伴い、1958年から清溪川は本格的にコンクリートで覆われ、1967年からさらにその上に幅16m、長さ5.6kmの高架道路が建設されました。その後30年間、清溪川はコンクリートの下を流れる下水道となりました。清溪川を覆蓋した上部には幹線道路が整備され、その沿道



1950年代



清溪川を覆う高架道路

は電気屋、靴屋、服屋など多様な小売店が軒を連ねるソウルで最も過密な市街地の

一つになり、清溪川周辺の環境汚染、交通渋滞、高架道路の老朽化などの深刻な社会問題の一因となりました。

ソウル市は2003年に清溪川復元事業を開始し、高架道路は撤去され、2005年10月1日、清溪川は復元されました。この事業は、歴史や文化、生態環境を創出することを主な目的とし、自然と人が共生する都市を目指して進められました。

清溪川は、漢江の水や地下鉄駅に湧き出す地下水を浄化し、上流にポンプアップした水がながれています。その起点から下流に向けて、歴史(伝統)、文化(現代)、自然(未来)のテーマで3区間を設定し整備されています。河川の







改修後の清溪川の様子

復元とともに、文化遺跡である橋も復元されました。また、現在の清溪川には、高架道路の橋脚の一部が残されています。

2年3ヶ月という短い期間で行われた事業ですが、2002年7月の李明博氏のソウル市長就任以降、清溪川復元推進本部の数千回にも及ぶ大小様々な規模の懇談会、セミナーなどの活動により住民との合意形成に至った経緯があります。それら努力によって覆っていたコンクリートを除去し、河川を復活させたことによって、市街地の中に自然が存在する憩いの空間ができ、地域の人々は長い歴史やすばらしい文化の中で暮らすという誇りを取り戻すことができました。



改修後の清溪川の様子



水辺を利用する生物

**清** 溪川周辺が市民の憩いの空間、文化的空間、観光の拠点となるよう、ソウル市ではグリーンベルト（緑化帯）や、漢江へのアクセス道路の整備等の継続事業が実施されています。

清溪川に足を運ぶと、いつも多くの人でにぎわっています。清溪川に架かる22の橋は、かつてのように人々が行き来し、川の両側の小道は人々の散歩コースであり、生活通路でもあります。大都市の市街地でありながら、魚類や鳥類の姿も見られ、復元事業前に比べて生物の数が増えているという報告もされています。

現在では多くの観光客が訪れる観光スポットとなっており、日本語のホームページも整備され、ガイドが案内してくれる清溪川ツアーがあります。2005年に開館した清溪川文化館では、清溪川の歴史や復元事業について展示されています。



人々ににぎわう上流端